増田みず子
mizuko masuda
夜のロボット

夜のロボット

mizuko masuda

増田みず子

夜のロボット
昭和六十三年三月三十一日　第一刷発行
著者——増田みず子
©Mizuko Masuda 1988, Printed in Japan

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—三　郵便番号二三　電話東京(三)九四五—二二一（大代表）
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社
定価——一二〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-203807-2(0)　（文1）

夜のロボット

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1

待合室からは、院長室へ通じる廊下の入口が見える。尾山藤子は、待合室のベンチに腰をおろして、さっきから誰も通らない廊下を眺めている。

院長室へ退院の挨拶にいく、といって両親はだいぶ前にその廊下へ入っていった。それきり戻ってこない。病院内はしんと静まり返って、人の気配が感じられなかった。

まわりが静かすぎて、頭のなかが不安定に揺れているのが、よくわかる。何も考えていないつもりなのに、どこからともなく様々な思いが漂ってきて、藤子の頭のなかに流れつき、集まって、やがて消えるのだった。いつかどこかで見たことや、きっとこれから起こるのだ

ろうと思われることが、浮かんでは消える。藤子の頭のなかは、底なしのゴミ捨て場のような状態になっている。

自分が生きているのか、死んでいるのかさえ、よくわからなかった。多分生きているのだろうとは思う。けれど自信はない。いったんは死んだはずの体が、こうして生きていて、いろいろなことを思い浮かべているのは、不思議な感触だった。生きている、と自分にいい聞かせようとすると、目まいが起きそうになる。自分がどこにもいないような気がしてくる。

いつも、何か、半分だけわかっている、という感じがする。もどかしかった。半分以上わかりたいと思うと、体がいやがって、吐気に襲われるのだ。

退院のことも実感がなかった。追い払われるような気がしていた。退院が、病院の休診日にあてられたせいもある。窓口は閉じられ、正面玄関には、白布のカーテンがおろされている。暖房も止められている。

誰も知らない間に、自分はここから連れ出されるのだ、と藤子は思った。

もっとも、一昨日、退院する、といいだしたのは藤子自身だった。今となっては、その時なぜそんなことをいいだしたのか、また、なぜ、院長はあっさりと退院を許可したのか、思いだせなかった。どうしても退院しなければ困ると思い、理由もこじつけたはずなのだが、院長の方はほとんど冷笑といってもいい表情を浮かべて、取り合ってもくれなかったのであ

る。それがどういうわけか、気がつくと退院の話が決まっていた。

話の筋道を、藤子が忘れてしまっただけなのかもしれなかった。ほんの少し体を動かすか、まばたきをするだけでも、視野が遠のいたり、近づいたり、黄色っぽく濁って見えたり、急に鮮明になったりする。記憶も、それと同じだった。

いつの間にか、自分がなぜ人気のない待合室にぽつんと一人でいるのかも忘れて、「こんなに長い時間、私を一人ぼっちで放っておいて、あの人たちは、心配にならないのだろうか」と、胸のなかで心細げに呟いている。眼は、カーテンを透かしている陽の暖かそうな色をじっと見ている。

光は、カーテンのひだを伝って、リノリウムの床に静かにこぼれ落ちていた。陽溜まりがきらきらと金色に輝いている。隙間風でも吹きこむのか、床に横たわる金色の帯は、時折、光を増してさざなみをおこすかのように、揺れていた。

藤子は、着ぶくれた体をのろのろと光の方へ運んでいった。カーテンの向うから、おもてを走る車の音が響いてくる。音までが、陽の色に柔らかく包まれて、軽快に聞こえた。懐しい音と光だった。半月ほど藤子が暮した病室は、一番奥まったところにあって、外からの物音もめったに届かず、陽も射さなかった。

腰をかがめて、カーテンの前にしゃがみこむ。指先で、そっと床に触れてみる。すると、

その拍子に、光は大きく揺れて、輪郭を崩し輝きを失くしてしまった。陽溜まりは、またたく間に消えた。藤子の眼の前に残ったのは、ただの黒い影だけだった。指先に、水に触れたような冷たさがしみていた。それが自分の影だと気づくまでに、ずいぶん時間がかかった。体を引くと、光は再び甦って床に広がった。

そこら中が光りだす。ものが内側から光りだすのではなく、微細な光の粒子が、猛スピードで、あたり構わず駆け巡っているように見えた。眼の奥がちかちかとうずいた。そのうずきが、まだ実際には浴びていない、外気の激しい明るさを、藤子に想像させた。

それだけで藤子は、体がすくむ思いだった。自分はまだ病人なのに、もうすぐここを出ていかなければならない。まだまだ、この閉ざされた避難場所にいて、監視と看護の両方を受ける必要があるのだ。それを、わざわざ病院の休診日を選んで、誰にも知られないように、こっそり退院させられてしまう。闇から闇へ、という言葉が浮かんでくる。

藤子の、しびれ薬を飲まされたように、動きの鈍い頭は、治ったから退院する、というごく簡単な道理をなかなか認めようとしなかった。

以前は、もっと、たくさんの言葉を知っていた、と藤子はまた別のことを、散漫な頭で思う。それらの言葉を複雑に組み合わせて、何の苦もなく操っていたはずだった。けれど、どんなふうに頭で言葉を動かせば、ものを自由に考えることができるようになるのか、今は、

それが、どうしても、思いだせなかった。
「何も思いださなくていいのよ。全部、忘れてしまいなさい」
母親はそういう。いわれれば藤子はそのたびにうなずいてきた。藤子も、思いださない方がいいような気がしている。ただ、何を忘れてしまったのか。思いださない方がいいというのは、何を、なのか、誰にも訊くことができないのがもどかしい。

話では、心臓の機能が一時的に三分の一くらいまで下がったということだった。体じゅう、どこもかしこも、働きが鈍くなるのは当たりまえだといわれた。
おまけに、軽い記憶喪失にかかっているかもしれない、という。
「そうなっても仕方がないだけの、ひどいことを、あなたはしたんだよ。命をいらないという人にとっては、そのくらい何でもないだろう？」
そういったのは、藤子の担当医でもある、六十年配の院長だった。
藤子は、彼に気に入られていなかった。院長は、藤子の命が助かったことも、入院していることも、それから退院することさえも、ことごとくが気に入らない様子だった。藤子の病室に現われるたびに、君のような人を患者とは認めたくない、というようなひと言ふた言の文句を忘れずにいう。そのままいってしまうこともあるが、口を開けば、その口から文句が

ぽろぽろと飛びだしてくる。

きっと、これから後もずっと、院長は藤子という患者を覚えていて、腹をたて続けるのだろう。

そしておそらく、藤子の方は、退院して半日もすれば、院長のことなど、きれいさっぱり、忘れてしまうに違いなかった。命を助けてもらい、大学へも警察へも連絡しないで、「何もなかった、ということにしましょう」といってくれたそうだが。院長のおかげで大騒ぎにならずにすんだのだから、感謝しなければならない、と両親にはいわれている。けれど、その人が自分と関わりのある人間だということが、どうしても実感できない。

医者にとっては、腹を立てるだけの理由があった、ということになるのだろう。それを何もなかったことにするのは、医者の勝手だった。感謝しろといわれても、そんな感謝の言葉は、自分の耳にもうつろに響くに違いない。

実際、感謝するようなことは、何もなかった。少なくとも、彼らが想像しているようなことは何も起こらなかった、と藤子は思っている。

「一体、何があったんだね」

父親が、抑えた調子で、ベッドの藤子に訊ねたことがあった。まだ、意識を回復して間もないときだった。藤子は、ぽかんとして、その質問の意味を理解できなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「何をしでかしたんだね」、と父親はいったのかもしれない。「さあ?」と藤子は眼だけで答えるしかなかった。舌が痺れていて、口をきくことができなかったし、実のところ、そのとき、父親の顔を見ながら、それが見たことがあるような人だが、誰だったのか、よく思いだせなかったのだ。

すべてを思いだすにしても、すべてを忘れてしまうにしても、また、何もなかったことにするにしても、もっともっと時間がかかりそうだった。もっと休みたかった。

藤子は体を静かにベンチの上に横たえた。体をまっすぐに起こしておくことが、少しつらかったのだ。横になると、荒かった息がすっと水に沈むように静まっていった。頭のなかの濁りも、少しずつ沈殿して透明になっていく。いろいろなものが見えてくる。

この半月余りの間に起こったことを、忘れてしまったのではない。記憶が、黒っぽい固まりになって、頭の奥に押しやられている。それが眼を閉じると見えることがある。もちろんそれは、藤子がそう思っているだけで、具体的に思いだそうとすると、記憶も現実も境があやふやに溶け合って、結局、再び水底の沈殿が舞いあがったように、濁ってしまう。

泡のように小さな疑問が、どこからともなく湧いてくる。だんだん大きくなって、そのうちにはじけて消えてしまうまで、藤子は、疑問の泡を遠目に眺めている。次第に、視野が小さく、暗くなっていく。

あの人たちは、私に何を忘れさせたいのだろう？　私は、何を思いだしたがっているのだろう？　思いだしたがっている？　私が？

自分の呟きを聞いた気がした。同時に、誰かに呼ばれた気がした。ほんのわずかの間だが、藤子は意識を失くしていたようだった。

母親の顔がすぐ眼の前にあった。こちらを心配そうに覗きこんでいた。

「大丈夫？」

藤子は母親の腕に助けられて、ベンチの上に起き直ると、素直にうなずいた。

「部屋でおとなしく待っていればよかったのに。淋しかったの？」

母親の声と表情は、不思議な魔力を持っている。藤子のからっぽの頭のなかに、甘い響きが快くしみわたっていく。習性になった甘えた笑いを、藤子は母親に向けた。そうなると藤子は、すっかり母親のいうなりの、ぐにゃぐにゃの人形でしかなくなるのだった。ただ、やさしすぎる母親の視線に、強く見つめられすぎると、口のなかに粘りけのある苦味のようなものが広がって、落ちつかない気持にさせられた。

けれど、いつも母親は藤子を見ていた。藤子は、その眼を逃がれて、どこかへいってしまうことができない。どこへもいかず、その場にじっとうずくまって、母親の視線を浴びている。病院で少しずつ正気を取り戻していく間に、母親のやさしい視線が、空気のように必要

なものになっていた。
母親のうしろに隠れるようにして、父親が立っている。父親は、「一体、何があったんだね」と訊いて以来、一度も藤子に直接話しかけようとしたことがない。いつも、母親を間において、そっぽを向きながら、ひとり言を呟くような喋り方をする。父親の表情は、院長に似ている。いつ見ても不機嫌そうな顔をして、口を固く結んでいる。
タクシーを呼んでくるように、母親が父親に頼んでいる。父親は無言で、その場を離れていった。
母親が藤子の耳に囁く。
「パパはまだ怒ってるけど、でも平気よ。どうしていいかわからなくて、途方にくれているだけ。藤子は何も心配しなくていいからね」
これも何度も聞いた言葉だった。耳に馴染んだ快い音楽と同じだった。言葉の意味はどうでも、母親の声の調子が藤子を快くさせる。
母親は、藤子の頭を抱くようにして胸に引き寄せ、少しの間じっと動かずにいた。柔らかい胸から、いい匂いが漂ってくる。
「私たちも行きましょう。早く帰って、家でゆっくり休めば、きっとせいせいして何もかも忘れられるわ。急に立ったりしないで、ゆっくり立つのよ」

母親の温かい息に首筋をくすぐられながら、藤子はいわれたとおりにした。母親の体にしがみつくようにして体を持ちあげると、着ぶくれた体の動きも、ふいに楽になったようだった。

藤子は、母親の手に背中を支えられて、しずしずと歩いていった。自分の姿は、人の眼にしおらしく映るだろう、とぼんやり思っていた。

裏口から外へ出た。見送る人は誰もいない。

父親が手招きしている。裏口から表玄関の方へ回ると、そこにタクシーが待っていた。

「急いで」

父親の気短な声にせかされて、まず母親が、続いて藤子が、後部座席に乗りこんだ。さらに父親が、藤子に肩を押しつけるように乗りこんできた。車が走りだした。まるで逃げだしていくようだった。

「さあ、やっと帰れるわ。今となると、名残り惜しい気がしないでもないけど」

母親がはしゃいだ声でうしろを振り返るのにつられて、藤子も振り向いた。小さな灰色の建物があった。少し走るとその建物は、遠のき、他の似たような建物に紛れて、見分けがつかなくなった。

藤子は、病院の名も、院長の名も、病院の所在地も、知らないままだった。聞かされたことはあるのかもしれないが、そうだとしても、思いだせなかった。藤子のカルテも、病院と一緒に、街の風景に紛れて消えてしまえば、それこそ何もなかったと同じことにはならないだろうか。

車のなかでも母親は、小さな子供にするような世話のやき方をした。藤子はシートに深くもたれて、頭を母親の肩に乗せ、眼を瞑った。眠気が、懐しいようなにおいをさせて、ふわりと戻ってくる。すぐにでも眠ってしまいそうだった。

病院のベッドが思いだされた。ベッドに横たわってさえいれば、眠りの方から藤子に寄ってきた。霧雨状のシャワーに似た母親の視線が、眠っている間も絶えず体の上に降っているのが感じられた。小さな虹が、部屋いっぱいにちりばめられている感じだった。それが、眠ることを楽しみにさせていた。その心地よさを、藤子の体は恋しがっていた。

車のなかの寝心地はよくなかった。眠りが近づいてくるかと思えば離れ、離れてしまうかと思えば、また寄ってくる。静かにものを考えるだけの正気は、まだ藤子にはなかった。眠ってしまいたかった。眠っている間なら、どこへ運ばれようと、気にしないでいられる。

寝息に近い、深くてゆっくりした呼吸を、藤子は、試しにしてみた。うまく、気が遠くなってくれそうだと思った途端に、妙なにおいが鼻についた。自分の体から漂ってくる薬のに

おいだった。たくさんの、用途のわからない薬品が、それこそ、体中の血液と入れかわってしまってもおかしくないほどの量で、藤子の体に注ぎこまれていた。眠っている間も、点滴は休みなく続けられていたのだから、もしかすると血液の全部を足した量よりも多くの薬液を吸いこんだ、水ぶくれの体になっているかもしれない。

少し、息苦しかった。手のひらや首筋が、汗でべたついていた。薬液が、汗腺という汗腺から吹きだしてくるようだった。

車に酔い始めたのだろうか。藤子の頭の隅を、遠足のバスに酔って苦しんでいる、小学生の頃の自分の姿が、ちらりとかすめて過ぎた。車酔いをする質の藤子は、バスでいく遠足のたびに、死ぬ思いをしたものだった。緊張と疲れとで、翌日は必ずといっていいほど、熱を出して学校を休むはめになった。

藤子はいつしか朦朧とした意識のなかで、小学生に戻って、波のようにひいては押し寄せてくる嘔吐感に耐えていた。後頭部をシートに強く押しつけ、手足を突っ張るようにして、幾度も生唾をのみこんだ。重い空気が全身を圧迫してくる。上もなく、下もなく、不安定な姿勢でどこかへ落ちていく心地がする。藤子を包む、濃すぎる空気は、不快な振動をやめない。その揺れが、母親の柔らかく生暖かい体を通して、大きく不規則に増幅されて、藤子を揺さぶる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com